

【中学校の部・優秀賞】

「平和の礎」に思うこと

沖縄尚学高等学校附属中学校

三年 野原 由梨奈

今年も「慰霊の日」が近づいてきました。この時期になると、戦争についての学習会や、平和集会などが開催され、改めて平和を願う気持ちが一層強くこみ上げてきます。

私が所属していた合唱団でも、「歌を通して平和の尊さを願う」ことを目的に様々な活動を行ってきました。その活動を通して、特に印象に残っていることが二つあります。

一つ目は、平和祈念堂での合唱奉納です。その年は特別に秋田県の高校生がハンドベル演奏を奉納しました。祈念堂に響き渡る大小様々なハンドベルの音色やハンドベル演奏に合わせて歌ったことが今でも心に残っています。

二つ目は、昨年の夏、広島市で行われた全国平和祈念合唱祭へ参加したことです。原爆という想像もつかない兵器により、一瞬にして命を失った人々へ鎮魂歌の奉納を行いました。全国各地から参加した合唱団員の平和を願う気持ち、指揮棒のもとで一つになり、会場の方々からものすごい拍手をもらったとき、自分達の気持ちを伝えることができたことを実感し、深い感動を覚えました。

私が、「戦争の恐ろしさ」「平和の尊さ」について深く考えたのは祖父の戦争体験を聞いてからです。

私の祖父は、いつも優しく、笑顔が絶えない働き者で、とても物知りです。そんな祖父は、少年時代を南洋群島のパラオで過ごしたそうです。決して裕福ではありませんが、両親と兄弟七名で島での生活を楽しんでいた

そうです。ところが、太平洋戦争が激しくなり、強制的にセブ島というところへ疎開させられました。ここでは、想像を絶するほど米軍の激しい総攻撃をうけることになったのです。

ある日、祖父の母は日本兵に呼び出され「戦況が悪化した。今夜を期して転戦する。そのためには、老人、子供は戦いの妨げになる。どうせ我々も後で死ぬ運命だから子ども達の命を絶ちたい。同意してくれ。」と強く言われたそうです。

その後のことは、祖父は話そうとせず、口をつぐんでしまいました。

昭和二十年八月の下旬に日本が戦争に負け戦争が終わりました。結局、祖父の九人家族は、二ヶ年で六人が戦争の犠牲になってしまったのです。

いつか、母が話していたのを思い出しました。

「お母さんのおばあちゃんってどんな人だったの。」

「そうね、無口だったけど優しいおばあちゃんだったよ。でも、笑う姿をあまりみせたことがないのよ。いつも寂しそうな顔をして、どこか遠くをみていたよ。寝るときはいつもお母さんを側に置いて抱いてくれたよ。」

目の前で我が子が連れて行かれるのを見ていて止めることもできず、ただただ身を潜めていることしかできなかったのです。その時の悔しい気持ちや子ども達の叫び声、泣き声は戦争が終わっても絶対に忘れることができなかつたことでしょう。

どうしてこんな恐ろしい戦争を止めることができなかったのでしょうか。何十万人の尊い命を奪ってしまった戦争。戦争によって、六人もの家族を失ってしまった祖父の胸に

は忘れたくても忘れられないあの恐ろしい光景が今でも深く残っていることだと思いません。

「戦争の時代は、人間が人間ではなかったんだよ。人間としての正しい判断をすることができなかったんだ。」

祖父は目をつぶってあきらめたようにゆっくり話してくれました。

その年の六月二十三日、朝早くから、お花と水、線香を準備して祖父と一緒に平和の礎へ向かいました。

平和の礎には、祖父の家族であった六名の名前が刻まれています。祖父は、一人ひとりの名前をなでながら、

「おじいちゃんのお父さんはね…。」

「おじいちゃんのお兄さんはね…。」

と昔の思い出を辿るようにしながら私たちに教えてくれました。

周りを見ると、多くの人が祈りを捧げていました。祖父と同じように戦争によって家族を亡くした遺族の悲しみは、計り知れないほど深いものでしょう。

今年、終戦六十六年目となります。戦争の酷さは、「人々の命を奪うだけではなく、残された人々の心にも深い傷跡を残していることだ」ということを改めて感じました。

「もう、二度と戦争をしてはいけない。」

私は、「いつまでも平和な世の中であり続けること」それだけを心から強く願いたいです。